



出版稲門会

◎コロナ後の社会と稲門会 筑紫恒男 (1頁)

◎寄稿：金子豊/白石泰夫/田中佑輝/渡辺隆 (2-3頁)

◎とまりぎ：内田真介 (4頁)

●発行 出版稲門会 東京都台東区台東2-24-10 (株)新星出版社内
電話 03-3831-0743 〒110-0016

●発行人：筑紫恒男 ●編集人：北口克彦

●016号 2021年10月1日発行

題字：服部敏幸

2018(平成30)年6月10日に、前会長・小峰紀雄氏が突然旅立たれたため、当時副会長を務めていた自分が会長代理となり、同年11月の総会で出版稲門会の会長に就任しました。

小峰さんから副会長就任を要請された折には、2019年の出版三田会との合同懇親会まで務めてあとは自由の身になるはず……でした。

当会は、服部敏幸氏(講談社・故人)が日本書籍出版協会の理事長をされている時、その活動を支援するために発足したと聞いています。設立後37年となりますが、現在の活動は、年1回の総会・講演会・懇親会とゴルフ会のみで、年会費も総会時に集めるというきわめて緩やかなものとなっています。

大体、早稲田大学で学んだ者は、卒業後群れず、それぞれの道を歩めば良いものと考えていました。現会員の方もかなりの方がそのように考えておられると思います。私自身、当会に誘われた当初(1990年ごろ)はあまり関心がなく、入会申込書を出しただけで、時間があれば総会に参加するという状態でした。

しかし、年1回とはいえ総会への参加が複数年にわたりますと顔見知りの方も増え、話が弾むようになります。仕事のこと、仕事以外のこと、お互いの共通点である早稲田大学と出版関係ということを通し、学部が違い、卒業年が違ふ者といういろいろな話ができることに本会の意義を思うことが多いです。年齢を重ねてくると、その

コロナ後の社会と稲門会



出版稲門会会長
筑紫恒男

ことが、より一層大切に思えてきます。

昨年初めから流行しだした新型コロナウイルス(COVID-19)の感染拡大により、私たちの生活は大きく変わりました。会社への出勤を減らしてテレワークで仕事をし、打ち合わせもZOOMで行なうなどです。

早稲田大学も早々に教室での授

業をやめ、オンライン授業となりました。昨年入学した学生は、入学式が行われず、大学に通えず、自宅での授業という状態になっています。

コロナ感染予防のためにちむを得ないかとは思いますが、人と会話を交わさないことが良いとは思えません。会社に行ったり、学校に行ったり、一緒に食事をしたり、飲んだりすることで得られるコミュニケーションがいかに大切であるかを痛感させられます。こうした人と人とのコミュニケーションの欠如が、

集団行動ができない、友達ができないなどの、社会的問題につながっているとするなら、それは到底看過できないものです。

社会は、人と人とが接してお互いのことを思い、お互いの意見を交換しつづつ形成されていくものです。新型コロナと付き合いつづ、これからの社会をどのように組み立てていくかが、今後の課題となるのではないのでしょうか。早稲田大学の発展に協力しつつ、出版稲門会も、それらのことを踏まえてより良い方向を探りたいと思います。

(建南社会長・昭44教)

早稲田界限

▼コロナ禍はどこまでつづくか。みるぞである。プロンプターに目を据えて文字を追う首相を国民はどう捉えているか。怒りか諦観か。オリ・パラ強行・感染再3爆発。で、首相は言う。「五輪関係なし」ようやく出口が見え始めた。「明かりは見え始めている」と言い募るのだから腰を抜かしてしまうではないか。

▼校友の作家・村上春樹さん(昭50文)は「彼は見たいものだけを見ているのかも……」と語り、「ぼくには出口なんか見えていません。この人、聴く耳を持っていない。(プロンプターを見る)目だけはいのちも知れないが……」とそれとなしに言う。出るは溜息ばかりなりか。

▼今秋、母校4号館に国際文学館(通称「村上春樹ライブラリー」)が開館する。村上さんが自身の作品に関わる膨大な原稿や書籍・資料等を寄託・寄贈して生まれた。設計は特命教授の建築家・隈研吾さん。施工を熊谷組・丹青社が空間デザインを担う豪華布陣で竣工開館する。

▼東京オリ・パラ。商業主義に強引な政治利用……。オリンピック精神は何処に思おう。だがスポーツの心をゆさぶる力はすごい。奇しくも校友が旗手を務めた。オリで須崎優衣(レスリング・スポ4年)、渡邊聖未(柔道・平31スポ)、パラで岩渕幸洋(卓球・平29教)と谷真海(トライアスロン・平24スポ研)の4人だ。参加校友すべてに万感の拍手を贈ろう。

(國師尚幸・元八福社・ほろぶ出版社長・昭43法)

切りのいい年に



金子 豊

三省堂の北口さんに会報への寄稿を命じられ、「さて何を書けばよいのかしらん?」と考えていたら、今年が「切りのいい年」だった(北口編集長は承知の上でのご指名でした?。卒業後ちょうど40年、歳をとるはずである。この間、2、3回は仕事絡みの取材で早稲田を訪れたが、特に何もなかった。

久しぶりに母校の周辺を歩いてみた。老舗の蕎麦屋はすでになくなっていることは知っていたし、一方で地下鉄の駅近くのラーメン屋は頑張っていると人づてに聞いていた。旧安部球場側が様変わりしているのも織り込み済みで、大隈講堂、南門、早稲田通りの穴八幡はかつてと同じ場所にある。記念体育館跡に完成した「アリーナ」は、その環境対応ぶりは「新時代のワセダ」とやらで「これはこれでありでしょう」と納得する。「センチメンタルジャーニー」にならないように気を付けて歩いてい

のだが、次第に何か落ち着かない気になってきた。

明るくきれいな街……。構内の学棟や周辺のビル(なぜか小ぶりのマンションが目につく)も建て替わり、道路や街路樹の整備も進んだのだから当然だろうが、こんなに明るかつたらうか。特別に「暗い学生時代」を送ったわけはないが、授業に真面目に出るわけもなく、いつも3号館の裏通りにたむろしていた頃とのイメージの落差に戸惑った。

早稲田の街を意識しながら歩くのは初めてである。在学時には、屋過ぎに地下鉄の駅から南門まで、人の流れに紛れながらよろよろ歩き、教室にようやくたどり着けば、もう黄昏時。今度は西門から這い出して高田馬場の山手線沿いの店か、中央線の荻窪の駅近くのスナックで飲んでおり、そんな日がずっと続く気がしていた。

久しぶりの故郷(ふるさと)に違和感を覚えるのは、街の変化以上に、故郷で過ごした「あの頃」が二度と戻らないことに気づくからかもしれない。これまで〇〇稲門会や大学出身の経営者の会合などに意識的に顔を出さずに来た。「あの頃はどうかだった、こうだった」「いやいやそれは…」などと昔話に興じるのも恥ずかしいが、「あの頃」から遠く離れた自分に

気づくことを避けていたのかも知れない。卒業後40年、大きな落差を感じながら街を歩き、早稲田は遠く離れた心の故郷だとうまく気付いた次第である。そういうには「都の西北」にそんな一節があった、何を今更さら、トホホ…である。

(白鷺フラザ&サービス社長・昭56政経)

かけがえのない日々



白石泰夫

誰しも学生時代の回想はいささかの恥ずかしさがつきまとうものと思いますが、本当に在学時はいまま思いついても冷や汗をかいてしまうような記憶ばかりです。

そもそも毎日自宅から西早稲田には確かに行っていました。キャンパス内に立ち入ることはごく稀で、ほとんどは正門前の学生会館内にあつた音楽系の所属サークルの溜まり場か、付近の音楽スタジオ、もしくは中古レコード屋を巡る日々。そのため、学内どこに自分の所属学部の棟があつたかもよく覚えておりません。確か

近くに演劇博物館があつたことはおぼろげな記憶にありますが、当然立ち入つたことなど一度もありませんでした。

講義はほとんど出席せず、成績は常に最低ランク(当然です)。これでは4年間で卒業はともにおぼろげな、でも早稲田は中退したヤツのほうに世に出て大成するとか言うし、まあいいか、などと自嘲的な言い訳をつぶやいていたのですが、たまたま4年生のときに学費値上げ反対全学ストライキが突如勃発し、これによって試験がすべてリポート提出に切り替わる事態となり、これがまたなぜかすべて通つてしまいギリギリのラインで卒業できることになつた次第です。

そんなどうしようもない学生生活だったので、まともな就職活動(80年代半ば当時は「就活」という略語は存在しませんでした)も一切行つておらず、ゼミやクラスの連中がやれ総合商社だ、大手金融だ、新聞社だと次々と内定をもらうなか、こんなはずではなかった、もう少し遊んでいるつもりだったのにとモラトリアム(この言葉は当時流行っていました)への未練を募らせるばかり。

ほとんどの業界に興味を持てず、あれもダメこれも向かないと消去法の末、本や雑誌は子どもの

頃から好きだったし、日本語を扱う仕事ならなんとかできるかもと考え、出版業界の末席を汚すに至つたという経緯です。

いまではあり得ないと思います。40年前はまだ大学も先生も教務も牧歌的な雰囲気があり、こんなバカ学生の存在を許してくれた早稲田の懐の深さに感謝するばかりです。またもうひとつ、学生時代の友人たちは良くも悪くも実にさまざまな出自・個性を持った人間が多く、いまなおその付き合いは続き、その後の人生に楽しい彩りを添えてくれています。この多様な人材が集うということも早稲田の持つ包容力が故ではないかと思えます。

世界が100年に一度のパンデミックを迎えているいま、そうした交流がリアルな場では困難な状況が続きますが、SNSではむしろこれまで以上に活発なやりとりがあり、学生時代の馬鹿話や昨今の世情の話題に花が咲きます。わずか4年間、しかしかけがえのない4年間であつたことを改めて思う日々です。

(医薬業出版社長・昭60政経)



都城にて 奮闘中!



田中佑輝

第二の故郷のような所沢キャンパスを卒業してもうすぐ10年と考えると、年を重ねたなと感じながらこの原稿を書いております。

私は人間科学部で主に生理学の研究室に入りながら、熱中症の研究をしていました。陸上をしていた関係で、「人体」について中高生の時から興味があったのです。卒論では「運動習慣のある人・ない人で熱中症のかかりやすさに差があるのか?」をテーマに、被験者にとつて少し過酷な卒業研究をしておりました。

しかし、一番の思い出は陸上同好会で陸上に取り組んだことです。種目は200mや400mの短距離をしておりました。代々木公園にある競技場で日々トレーニングを積んでいたのが懐かしいなと。東京へ出張に行った際は、大学時代の陸上仲間と会うことが多いのですが、今は東京にも行きにくい状況です。

個人的な話ですが、昨年の夏に

入籍し、挙式の準備を進めておりましたが、開催を延期し続けております。陸上のメンバーも招待を予定しているのですが、コロナ禍が終息したら、彼らにも会いたいものです。

現在は宮崎県都城市の「田中書店」に里帰りし、日々業務に取り組んでおります。宮崎も新型コロナウィルスにより、郊外店舗はプランスの影響を受けて売り上げを伸ばしましたが、商業施設内の店舗は館の客数減によるマイナスの影響を受けました。

その中で、弊社は「地元とのシナジー」をテーマに書籍販売以外の事業として、①地元の食品の販売、②郊外店に地元の有名洋食店のカフェの併設を始めました。

食品はスタート当初は扱った商品が少ない中、試行錯誤しておりますが、加工食品や冷凍食品など、スーパーでは扱っていない&手ごろな価格の商品のラインナップが増えました。売り上げを伸ばし、お客さまにも認知してもらえようになつております。併設のカフェは、ありがたいことにすでに繁盛している洋食店からお声をかけていただきました。SNSの効果も大きく、平日のランチタイムでも常に満席になるほどの店頭活性化が実現できております。

日々、情報を探りながら弊社に

導入できそうな商材や業種を探っております。何かと暗い世の中ですが、出版業界・書店業界に関わる方々の活性化が実現できるよう協力し合つて、この情勢を乗り越えていきたいと思います。

(田中書店店舗統括マネージャー・平田人科)

ONLY

YESTERDAY

—ほんの40年前へ—
のこと—



渡辺 隆

渡辺 隆

1967年〜8年、10歳のころに夢中になったドラマがある。歴史好きになつて、西洋史学科に入学した速因になったのかもしれない。「タイムトンネル」である(音楽がジョン・ウィリアムズであったのは最近知つた)。過去の様々な事件があった場所に、タイムトラベルするSF。そんな気分になつて、当時(1977年入学)に戻ると、いくつか記憶に残る場所がある。

まずは、第一学生会館(もちろん、今はない)。英字の新聞サー

は、消えていく。

クルに所属していたので、大学周辺で一番長く過ごしたのが、その部室。英語ができなくても所属できた? というサークル。留学経験があり仕事も英語を専門的に使いなすOBのおかげで、拙い英語で記事を書いても、きちんとプロフィール(校正の意だが、私の場合、ほぼ書き直し)してもらつと、それなりの体裁の内容にできあがるのである。カッコ良さそうという理由だけで入部した私にとつては居心地が良く、4年間在籍。暇さえあれば、顔を出していた。海外の出版社にマンガの版權を許諾する業務を担当することになつても英語アレルギーにならなかつたので、こんな経験も、のちのち、少しは役立ったのかも知れない。

次に、木造校舎。当時の第一文学部には「大学だよね、ここぞ」と思うような、歩くときしきし音がする床の感触が楽しめる建物があった。6年間の男子校生活に飽きていたという理由がほとんどで、文学部に進んだが、華やかさとは異なる地味な雰囲気。今の戸山キャンパスからは想像がつかない。授業の内容はまったく覚えていないが、門から先のスロープとあわせてキャンパスの風景としては、最も懐かしい。そこで、様々な出会いがあったかどうかはすっかり忘れた(都合の良いくない記憶は、最も懐かしい)。ところで、様々な出会いがあったかどうかはすっかり忘れた(都合の良いくない記憶

(編集後記・56頁)



20年前の思い出



内田真介

今から20年前の2001年、「新学生会館」ビルが戸山キャンパスの裏手に完成し、記憶によれば確か8月1日にオープンしました。「旧学生会館など構内各地に点在していたサークル部室を、新ビルに一堂に集める」という計画でしたが、一説には「革マル派の流れを汲む怪しいサークルの拠点一掃が目的」と囁かれたりもしていました。また、演劇系な

とまりぎ

ど「部室に住む」学生が多かったと聞きますので、大学はその辺も「まとも」にしたかったのだらうなあと思像しています。

移転が迫ると、元の場所に居座りたい学生の一部が抵抗の動きを見せました。私は、当時は3年生でサークルでは幹事学生でした。移転に抵抗してはいなかったのですが（賛成もしていませんけど）、抵抗している怪しげな人たちと意見交換したり、自身のサークルの引越越しに関連した相談で学生課に出入りしたりと、その周辺でうろちよろしていたのです。移転前日の夜には、プチ学生運動のよ

うな騒動を野次馬的に期待したのですが、小さな騒ぎはあったものの局所的で盛り上がりならず、むしろ「キレイなビルに引越した！」というウキウキ気分が学生の大勢を占めていたのかもしれない。なにせよ、「サークル」という学業と関係のない「居場所」が、私たちにはとても重要な関心事だったということはよく覚えていきます。

ちなみに、私がいたサークルの部室は、教育学部に属する6号館にありました。6号館での講義を受けることはめつたにない（そもそも授業に出ていませんが）にもかかわらず、日がな6号館に入り浸り、それこそ部室に泊まったことも何度もありました。6号館に部室があるサークルは希少だったので、その点も気に入っていました。移転してから、6号館に入ることほめつきりなくなりました。先日、久しぶりに早稲田を歩いてみました。20年で多くの館が建て替わりましたが、6号館はほぼ当時のままの姿で残っています。新学生会館はちよつと古くなり、当然ながら「新」は取れ、ただの「学生会館」として認知されてい

事務局だより

現在（9月上旬）、変異株を中心に新型コロナウィルスの威力は加速増強し、社会に様々な影響を与え続けています。そのような状況下で東京2020オリンピック・パラリンピックは本校からも現役・校友選手30数名の参加で開催され、期待以上の成績を残したといえるのではないのでしょうか。昨年一年間は、不自由な中でもなんとか早稲田で学んでもらいたいという大学側の意志により、卒業生・在校生からの寄付を中心に資金手当をし、設備や環境を整え、ほぼすべての授業をオンラインで行っていました。一年間の試行錯誤

の末、今年度は卒業式並びに昨年開催できなかった新2年生をも対象とした入学式も開催されました。また約7割の授業を対面で行えるよう対策をしております。稲門会活動も大学ならびに校友会の方針により、昨年は年に一度会員の皆様と交流する貴重な機会である出版稲門会総会・懇親会を開催することができませんでした。今年に関しては、昨年同様「緊急事態宣言発出時は、対面での稲門会活動は全面的に控えてください」「まん延防止等重点措置発出時は、感染対策を十分とった上対面で開催することは可能

編集 雑記

▼コロナ禍の中で「ニューノーマルの時代」と言われている。非接触・遠隔がキーワードである。しかし直接人に会い、交流することの意義はいささかも変わらない。今回はニューノーマルとオールドノーマルを組み合わせた原稿依頼。皆様ありがとうございました。

（北口克彦・三章堂会長・昭56政経）
▼著者先生から頂いた原稿だけは絶対に失くすな——社人になり

ただし飲食を伴う懇親会は是非とも控えてください」「緊急事態宣言・まん延防止等重点措置いずれか発出時は大学関係者の稲門会活動への出席は控えてさせていただきます。この方針が出されています。本来ならばこの会報にて本年度出版稲門会開催のご連絡を差し上げるところなのですが、このような状況ですので本年も総会の開催を見送ることとなりました。なお、予算・決算、役員変更につきましては、幹事会にて審議された結果を後日改めて書面にて皆様にご報告させていただきます。

また状況によりありますが、来春以降に研修会・懇親会等の企画・案内ができれば幸いです。よろしくお願いします。よろしくお祈りいたします。幹事長・富永弘弘（新華出版社長・昭59商）
初日に教わったことです。当時は、肉筆の原稿用紙を直接お目にかかって頂戴するものでした。コピーを取るまでは世界に一つしかない貴重な原稿。それこそ失くしたらエライことです。それが今じゃ打合せはZOOMに原稿やケラはメール。便利といえば便利かもしれませんが、どこか味気ないような…。たまには直接お会いしてぜひ一献傾ける場を持ちたいところですが、もつしほらくは辛抱せざるを得ないのでしょうね。（杉本淳一・日本実業出版社社長・昭57文）